

は　じ　め　に

この年報は1986年度に行った当研究所の調査・研究活動とそれに伴う公開普及並びに宮跡整備などの事業の概要をまとめたものである。当研究所は平城および飛鳥藤原の二つの発掘調査部、埋蔵文化財センター、飛鳥資料館、さらに建造物・歴史研究室と、多面的な構成をもって遺跡・建築・歴史・庭園など、主に不動産的な文化財を広く調査研究している。この年報でその一端を知って頂ければ幸である。

発掘では永年懸案であった頭塔に着手した。整備の事前調査であり、石仏の新発見や石積の形状を明らかにし得たが、瓦葺をもつ当初の姿の復原には至らなかった。飛鳥地域では石神遺跡の発掘が6年目を迎え、宮殿や官衙とも異なる特殊な配置をもつ斉明朝期の殿舎が判明した。全容の把握にはなお数年を必要としそうである。藤原京で官衙と思われる四町規模の宅地（左京六条三坊、貴族住宅らしい方一町の宅地（右京七条一坊）が発掘され、京内の建物がようやく判り始めたのは新しい成果である。平城京での宅地の発掘例は既に数十件を超えるが、藤原京では未だ緒についたばかりであり、今後が期待される。

平城宮では第二次朝堂院東第二堂の規模を確認すると共に、下層の掘立柱遺構を検出した。大極殿下層遺構と併せこの地域が当初掘立柱による朝堂院的空間であったことが確実視されるが、中央の第一次朝堂院との関連など宮の構成に大きな問題を投げ、その謎の解明が緊急の課題となっている。また京内の宅地の発掘も2地点でかなりの大面積を行い、それぞれに成果を収めた。このうち左京三条二坊七坪は今年度も続行し、長屋王の邸宅であったことが最近判明したもので、これはその前半の報告である。

そのほか古文書調査、近世社寺・町並などの建造物調査、法隆寺昭和資財帳関連の調査など多岐にわたる諸調査の一部を集録し、また埋蔵文化財センターが主として担当している遺跡、遺物の科学的調査法の開発研究のうちから新しいものをいくつか報告した。なお飛鳥資料館では毎年春秋の2回小規模ながら特別展を催しているが、「飛鳥の石造物」では須弥山に実際に水を通す試みを行い好評を得た。酒船石も模造ではあるが飛鳥への里帰りを意図したもので、今後も展示内容の充実に向けてまいりたい。飛鳥資料館は1975年開館後12年目の86年5月に入館者200万人を突破し、近年は平均して年間約23万人の人々を迎えている。

文化財の重要性が広く認識され、当研究所の役割も期待されるところが一層大きくなっている。人員、予算ともに厳しさが増すなかで、所員一同懸命な努力を続けているが、今後とも各方面の暖かい御支援と御鞭撻をお願いしたい。

1988年2月

奈良国立文化財研究所所長

鈴木嘉吉